



## 巻頭

戦場（いくさ）に出づる

千たび 千人の敵に かたんより

ひとり 自己（おのれ）にかつもの

彼こそ最上の 戦士（つわもの）なり （法句経 103）

## ◇新：法句経講義 6 3◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

「人に勝つより、まず自分に勝て」とか「まず、おのれに勝て」とか、昭和の戦時中の教えのように受け取られるかもしれませんが。でもそれは、いつの時代にも通用する、生きていくうえで大切な教えです。

朝起きる時、布団を出るつらさ。布団を出るには、まず自分に勝たなければ、出られません。学校や会社に行くとき、いつも、楽しい気持ちで行けるわけではありません。自分の気持ちをふるい立たせ、何とか出かける日だってあります。

嫌なこと、辛いことを避けたい、逃げたいというのは、誰だってあることです。でも、そうしたことをみんな避けていたら、いい経験もできず、忘れられない思い出も作れないかも知れないのです。

勇気をもって、自分の逃げる心、弱い心にかつこと。それこそが真の勇者だ。今時のアニメのセリフのようですが、けして間違ったことではありません。

「したいようにすればいい」とか「やりたくないことはしなくていい」とか、自分の気持ちを第一に考えようとする現代の風潮のなか、それだったら「自分」をいつまでも越えられない、自分を大きくしていけない、という考え方を伝えるアニメも、捨てたものではないなあと思います。

## 叙景 表紙を語る

コロナに苦しんでいるのは人ばかり。木も花も、鳥も虫も、コロナなど関係なしに、春に向かって一直線に進んでいます。

ふと見あげると、まっ白な光が、雑木林のうえに輝いていました。そうだまた春がくる。緑がめばえ、温かな風が吹きわたる春。そんな春が来たら、コロナに負けない、強い力が取り戻せる。そう信じ、前を向きたいものです。

八王子の園の、うしろに広がる雑木林での一枚。もう春がきます。

## < 主管所感 >

則天去私

友松 浩志

段々、もの忘れがひどくなってきた。メガネをかけながらメガネを探すなんて、まるで漫画みたいなことをするようになった。書類がなくなるのは日常茶飯事、探し物で何時間も無駄にする。人生の残り時間が少なくなっているのに、とイテイラする。

コロナ自粛の毎日、外に出かけることがメッキリ少なくなった。テレビはつまらないので、自然と本に手がのびる。最近、どうしても読んでおきたい本を読もうとするようになった。最近読んだのは、夏目漱石の「硝子戸の中」。漱石晩年の小さな随筆集だ。何故読んでおきたい本かという、文筆家志望だった父と母が、何かとこの本の名を口にしていたからだ。「ガラスドノナカ」は、頭にこびりついた書名だった。

漱石が晩年（といっても 48 歳の時）、体調を悪くして家に引きこもりながら、身の細々としたことを、思い出を混ぜながらグダグダと書き、新聞連載したものだ。これがまさに、コロナで家にひきこもり、グダグダしている身にぴったりした。人は、外界と無縁に生きられるわけではない。こもっていても、人が訪れてきたり、昔の思い出が頭のなかを過ぎていく。大正初め頃の、早稲田や高田馬場あたりの風景が、静かに語られている。

漱石は晩年、「則天去私」（そくてんきよし）という言葉理想としたという。これは漱石が作った言葉だそうで「私心を捨て、天の道理に従う」という意味である。昔の思い出を語るとき、自分のこれまでの人生が、まるで自分の意思というより、天の計らいのように感じられる、というのは、そろそろ私にも分かりかけてきたところだ。

それよりも何よりも、身のまわりのものが頭の中から去っていつてしまうのが怖くて、宣伝にのって、「記憶力」に効果があるという飲物を買ってしまいました。もの忘れが、やがて「自分忘れ」にならないよう、目の前の暮らしを大切にしながら、コロナの災禍が一日もはやく終わることを祈ってやまない。

## ◆西墓地別院志納金御礼◆

— 檀信徒の皆様のご協力に感謝して —



△ 正面入口 車が1台とめられます。

前号でもお伝えしたように、昨年7月下旬、西墓地隣地に新しく別院が完成しました。木造2階建て／1階・2階とも約57㎡で、1階は休憩所とトイレ、2階は礼拝室になっています。檀信徒の皆様には、たくさんのご協力を頂き（志納金総額:19,603,000円）厚く御礼申し上げます。これまで休む所もなかった西墓地利用の皆様には、念願の施設として1階でしばらくお話しされたり、2階の仏堂で法要をされたりと、活発な利用が始まっています。

檀信徒の皆様には、今号に志納金の寄付者名簿を同封させて頂きました。今回、東幕地の皆様にも、たくさんご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。

## ◆ 訃 報 ◆

■ 石上 善鷹 先生（大正大学名誉教授）

昨年11月29日遷化されました。（91歳）北海道のご出身

で、大正大学在学中から神田寺の青年会に入れ、卒業後は仏教学者として広く活躍されました。先々代の友松圓諦師の学門業績を継承され、平成27年には神田寺で、圓諦師の43回忌にあたって記念講話もして下さいました。

■ 関口 久志 上人（行田・醫王寺住職）

昨年8月29日遷化されました。（72歳）大正大学卒業後、神田寺総務・幼稚園主事として8年間ご奉職下さいました。法務事務に精通され、先代の友松諦道師の右腕として活躍されました。退職後も、彼岸会には毎回ご助力下さいました。

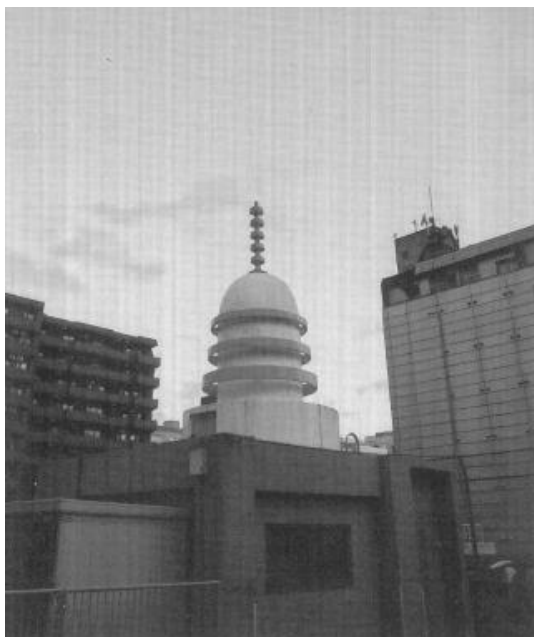
※「仏教豆知識」は、今号お休みさせて頂きました。

## ◆ コロナと戦う ◆

昨年から、コロナ感染予防のため様々な工夫をして保育を行って来ました。手洗い・うがいの徹底はもとより、間隔をとって活動したり、だまってバラバラに昼食をとったり、行事にも大幅な見直しが必要でした。子どもたちもがんばってコロナに耐えています。一日も早い終息宣言を待っています。



△マスクに大分慣れました。



## 巻頭

親しさより

うれいは生じ

親しさより

不安（おそれ）は生ぜん

親しさを

離れし人に

うれいなし

いずこにか

また おそれあらん (法句経 213)

コロナ禍のなか、外出が制限され、思うように人に会えなくなりました。人は人とまじわることで「人間」になると言われます。「人と会えない辛さ」、一方で人とのまじわりが「苦」になることもあります。「人」との関係、コロナ後の自分を、少しづつ考える時かも知れません。

## 叙景 表紙を語る

神田寺の建物の屋上にある法塔。混み合った街路からはなかなか見えません。法塔はお寺の象徴となるもので、本来はお釈迦様の遺骨を収めたものです。

神田寺の建物はもう築50年以上になって、まわりを高いビルに囲まれ、この法塔が見える場所のごく限られています。でも、その限られた場所からこの法塔を見つけて、頭を下げてくださいる方もおられます。ありがたいことです。

## < 主管所感 >

立ち返る場所

友松 浩志

神田寺は、戦後二つの寺が合併してできた寺なので、二か所にお墓がある。寺と離れたところにある墓地なので、そこに管理の人を置いて、1年365日お墓参りをお待ちしているが、どんなも来れない日もたくさんある。人件費も大変なので、お参りを週3日とか4日に限定したいところとだが、なかなかそうもいかない。お墓参りは、休日にする方も多いが、「命日」にする方もある。「命日」、特に父母兄弟・親族などの命日は、おぼえているもので、その日その数になるとその姿を思い出す。お墓参りに行こうかーとなる。だから、1年365日お墓参りの候補日となる。

私の母の命日は、8月14日である。その年の7月下旬、急な発熱で入院した母の病状は目まぐるしく変化した。病名も治療法もハッキリしないまま、アツという間に危篤状態になってしまった。8月12日の夜、親族が集まり始めていた頃、羽田発大阪行きの日航123便ジャンボジェット機が群馬県の御巣鷹山に墜落した。

その夏、日本中を騒がせた国内最大の航空機事故の顛末は、母の死、葬送の準備などで私の記憶にはない。事故の顛末を知ったのは、しばらくしてからのことだ。事故機には、父の友人も乗っていた。とはいえ、それ以来8月12日が近づくと、墜落現場の御巣鷹山への慰霊登山のニュースが流れ、事故が話題となり、私は母を思い出すことになった。

12日が命日となった多くの犠牲者の方々とともに、今年、母も37回忌を迎える。36年の歳月を思い、自分自身のこれからの考えるために、慰霊登山をするように、私も「お墓参り」をするだろう。

お墓というのは、「亡くなった人を入れる」というだけの場所ではない。生きている人が、そこに立って自分を見つめる場所、そこでなければ「立ち返ること」のできない場所である。あの山、あの尾根のように。